

早稲田大学高等学院研究年誌第六一号 抜刷
二〇一七年三月発行

日欧文化交流史の中のシーボルトの息子たち VII

——父親のライフワーク『日本』再版の編纂を
中心としたシーボルト兄弟の晩年の活動——

日欧文化交流史の中のシーボルトの息子たち VII

——父親のライフワーク『日本』再版の編纂を

中心としたシーボルト兄弟の晩年の活動——

牧 幸 一

はじめに

今まで筆者はこの『研究年誌』を通じて主としてアレクサンダーの外交官としての様々な公的な活動を紹介してきた。幕末の英国公使館員から明治の終わりまでの日本政府の雇い外国人外交官として彼の日本およびヨーロッパでの公的な活動に焦点を当てて、さまざまな事実を明らかにした。主に井上馨外務卿指導の下での二度に亘る条約改正交渉、さらにヨーロッパ各国でのその交渉に多くの紙面を割いた。それとの係りで伊藤博文との彼の交際の跡もたどってみた。日本の赤十字創設も広い意味での日本が国際的にも近代国家として認められた証として彼のそのための具体的な働きかけにも注目した（注一）。

もちろん弟ハインリヒも日本での条約改正交渉には、条約国側の通訳として深く係った。いわばシーボルト兄弟は彼らの立ち会いの下で日本と列強国間との熾烈なやり取りをつぶさに見た、歴史の証人であった。ただハインリヒは

その後そのまま日本のオーストリア＝ハンガリー帝国代表部に残り、兄のように直接、海外での交渉には立ち会っていないかった。

しかしアレクサンダーの方は、一八八七年、活動の場をドイツおよび条約締結の国々に移した。日本の外務省、外務大臣直属の通訳官及び参事としてヨーロッパ各国の日本公使と一緒に交渉に臨んだ。以前見たように、一八八九年のドイツから始まって、スイス、さらには一八九四年の英国との交渉が最後に実を結ぶまで、これまた、長い紆余曲折とした辛い一連の交渉であった。これも以前に見たとおりである。そしてこの交渉が終結を見たのと時を移さず、東アジアの地に日清・日露の戦争が繰り広げられたのである。この点も、前々回の『研究年誌』で見たとおりである（注2）。

ところでこの一八八七年からアレクサンダーを取り巻く環境が一変している。それまでは、例えば一八七八年から八一年の日本での条約改正交渉の開始までベルリンの日本公使館に、またこの第一回目と第二回目の間にはローマの日本公使館に、というように、アレクサンダーはヨーロッパのどこかの日本公使館に配属されていた。ところが一八八七年以降は、どこの日本公使館にも席を置かなかった。むしろ自由な立場で、必要とあれば、場所を変えてどこにも行く用意ができていた。もちろんドイツとの日本の条約改正交渉が行われている間は、アレクサンダーはベルリンを生活の拠点にしていた。イギリスとのこの交渉の間もロンドンが生活の拠点であった。しかしこういう、外務省からの要請を受けての重要な国際会議以外は、アレクサンダーはどこかの日本公使館に常駐することはなかった。

彼の私生活も変わった。一八八九年にはベルリンで伯爵令嬢エリザベート・フォン・ヘースリングゲン（一八六五―一八九八）と結婚し、バイエルン州アンスバッハのコルムベルク城に居を構えた。ここで娘三人と息子一人をもうけた。一八九六年にはウルム近郊のライプハイム城に移ったが、一八九八年二月には彼の妻がまだ若くして、四人の子供たちを残して死亡した。一九〇〇年にはこの城も売却し、後転々と生活の場を変える。ヴェルツブルク、ベルリンさらにはフランクフルト・アム・マイン。最後にはイタリアのジェノバ近郊のペリで息を引き取った。

このように私生活でも多難な時期に、アレクサンダーはむしろ集中的に、積極的に、外交官として、あるいは自由なジャーナリストとして広報活動、文筆活動を展開している。それは同時に、別な視点からいえば、日本の外務省、日本の明治政府のかねてよりの要請、望むところであった。一八九九年四月に刊行を開始した、玉井喜作編纂の『東アジア』(Ost-Asien)にほぼ定期的に、時には「鳴滝」というペンネームを使って論文を連載したのはその表れである。それに、ドイツばかりかヨーロッパにもよく知られている雑誌や新聞にも日本通、日本の外交官、有名なシーボルトの息子として彼の原稿が載っている。そしてそのような雑誌や新聞には、日本とヨーロッパの間を仲介する外交官としてやはり外交問題、時事問題、ニュース解説等が圧倒的に多い。ただそれ以外の文化的な、学術的な活動がないかという点、必ずしもそうではない。その代表的なものが、実は弟ハインリヒと二人で協力し合って、一八九七年に出版した父、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの『日本』の再版本の出版である。今回、この論文では、息子たちの共同作業の成果としてこの『日本』の再版本を中心に見てみたいと思う。その前に、今度は、弟のハインリヒの方にも目を向けて、彼のそれまでの足跡をたどることにしよう。

一八九六年までのハインリヒの足跡

一方のハインリヒは二回にわたる、日本での条約改正交渉に列強国側の通訳官、そしてオーストリア＝ハンガリー帝国代表部（公使館）の書記官として参加した。その模様が一つには神宮公園内の絵画館の絵にうかがわれる。が、兄とは異なつて、独自の外交官の道に進む。その後、一八八三年公使館主任事務官、一八八七年から二年間代理公使、さらに一八九三年には横浜の領事となつている。一八九五年には上海の領事代理を務めている。この間、一貫して、外交畑に専念して、一八八九年にはオーストリア＝ハンガリー帝国の皇位継承者、皇太子フランツ・フェルディナ

ト大公の訪日の際に彼の案内をしている。ただし残念なことにハインリヒは外交官として正規のルートを辿っていない。いわゆるキャリア組ではない。大学教育は受けていない。これは当時でも、決定的なことであつた。いかに有能で、外交畑で大きな仕事をしたとしても、正規の国家試験を経て、外交官にならなければ、公使、大使にはなれない。ただしハインリヒの場合、キャリアがなくとも、公使にはなれなくとも、実力と実績で、横浜や上海の領事あるいは公使代理になれたのである。オーストリア・ハンガリー帝国代表部の公使官員、クーデンホーフ・カレルギーは外務省にハインリヒを公使に申請したが、結局不可能だつた。

他方ハインリヒは公務とは別に、もう一つの個人的な、趣味的な、学術的な活動の方も決して等閑にしなかつた。むしろこれを積極的に推し進めた。父親と同じように、日本の伝統的な美術工芸品、考古民族学的な資料、仏像、武器等を可能な限り積極的に購入し、その多くを、特にウィーンの工芸博物館、民族学博物館、自然史博物館に寄贈した。その功績が認められて、ハインリヒはフランク皇帝より男爵の爵位を拝命している。

もともとハインリヒには兄と違って、日本の伝統文化に親しむ傾向が強かつたのであろう。幼少から父親にじかに接し、日本事情について教育を受け、父親の収集した学術的なコレクションを常に見て育つた。来日してからも、周囲には友人・知人に恵まれていた。日本でもヨーロッパでも著名なシーボルトの息子ということで、ハインリヒはどこでも歓迎された。かつてウィーン万博の折に、デンマークの考古学者J・J・A・ヴォルサーエと親交を結んだのも彼にとっては幸福な出会いだつた。日本国内でも主として在日ドイツ人の間で作られた学術研究会・ドイツ東洋文化研究協会(OAG)に加わり、ドイツ人の美術工芸研究者、その愛好者、さらには考古学者らと知り合いになつた。例えばその中には東京大学のお雇い外国人エドムント・ナウマンもいた。彼とは大森周辺で、モースとほぼ同時期に貝塚を発掘している。ハインリヒはこういう経験を踏まえて、考古学者として、独自の地位を確保している。これは、二〇一一年三月発行の『研究年誌』第五五号に掲載された。その後考古学的な活動はひとまず終わり、美術、工芸、

考古、民族学の資料収集に専念するのである。

なおハインリヒのプライベートなことになる、少し不可解なことも出てくる。日本では歳若くして、二〇歳で（一八七二年）日本橋の武蔵屋という古物商の娘・岩本はなと結婚し、四人の子供をもうける。そして晩年ハインリヒが単身でヨーロッパへ帰つて二年目（一八九八年）にオイフェーミア・カーペンターという当時三四歳の英国の未亡人とウィーンで結婚する。それから約一〇年間、南チロルのエツパン村のフロイデンシュタイン城で日本研究に従事して余生を送る。しかし一九〇八年、五六歳で死去。夫人も同年三か月後に死去。養女ダヴィダがいて、和書七二一点はケンブリッジ大学に寄贈した。その他のコレクションは競売にかけられたとのこと。ただアレクサンダーの日記にはちょうどこのころハインリヒの遺産を巡つて、日本から問い合わせが来ている。同じく「はな」となっているが、どうも岩本はなではないらしい。関西の出身で、もう一人の「はな」細川はなが実在したとしか言いようがない（注3）。

これはともかくとして、一八九六年にアレクサンダーとハインリヒがドイツのヴュルツブルクで再会したのである。ハインリヒは上海領事を辞任して一年間の休暇を取つた。これほど長く二人が再会するのは、かつてなかった。ハインリヒも体調がすぐれず、重要な仕事は今しかないと思つたのか、兄弟は父親のライフワークを新しい時代の、彼らの目から見てふさわしいものに仕上げようと決意した。『日本』の再版の編纂は彼ら息子たちに残された重要な使命の一つであつた。アレクサンダーは主として政治・財政・法律・制度・歴史等社会科学に造詣が深い。また外交官として貴重な体験と経験を積んでいる。一方ハインリヒは、どちらかといえば、人文的な、文化的な、芸術的な知見を備えており、しかも日本及び東アジアの文化史な背景に精通している。さて我々には馴染み深い『日本』の初版と比べて、再版はどうなっているのか。どういう違いがあるのか。日本も再版の方は一部紹介されているが、ほとんど知られていないのも同然である。以下、具体的に論述しようと思う。

1

シーボルト兄弟にとって、父親の存在は決定的な、絶対的なものであった。彼らは父の業績をそれぞれの場で継承するばかりか、それをさらに発展させるという使命も常に意識していた。父親が亡くなってからすぐアレクサンダーは一八六八年、パリ万博終了後、父の日本語の蔵書を大英博物館に寄贈する労をとっている。と同時に父が二回目の日本滞在の間に直接・間接に収集した民族学的な、工芸的なコレクションの多くをアレクサンダーはミュンヘンの民族学博物館に寄贈し、その際そのカタログを作成している。一八八一年には、ウィーンのシェーンブルン宮殿の庭園に設けられた父親の記念碑の除幕式にアレクサンダーは立ち会っている。そして今度はヴェルツブルクにもと考え、彼は自らその準備を進めている。翌年、一〇月には、一緒に里帰りした弟ハインリヒと共にその記念碑建立に立ち会っている。そしてシーボルト生誕一〇〇年目の一八九六年が来たのである。

日本赤十字の創設の仕事に共同でかわつていた佐野常民からアレクサンダーのところに書簡が舞い込んできた。「貴兄の著名な父親の生誕一〇〇年を記念して盛大に式典が行われた。・・・」^(注4)との知らせであった。当時アレクサンダーは、東洋での日清戦争の後の複雑な情勢を遠くヨーロッパの地から見て、日本から得た情報と日本の政府・外務省の見解をヨーロッパに発信しているところであった。いわゆる三国干渉の直後のことであった。しかしこの広報活動はもちろん継続し、むしろ積極的に展開した。しかし同時に、父親の生誕一〇〇年記念を契機に、父親の遺産、ライフワーク『日本』をもう一度、新しい時代に立って見直すのも息子たちに残された仕事のように感じたのである。すでに一八九六年の年明けには、ヴェルツブルクの高等学校のフランツ・イエーガーという教師がアレクサンダーに会って、一緒に仕事をしている。一月二日の日記には「イエーガーと二時間仕事をした。・・・ヴェルルに計画書を送った。」^(注5)とある。ヴェルルとはレオ・ヴェルルのことで、ヴェルツブルクの出版社の社長である。佐野常

民から報告を受ける前からアレクサンダーはすでに『日本』の再版を出版したいと計画していたと思われる。それに弟ハインリヒが上海領事を健康上の理由で辞任して、夏にはヨーロッパに帰郷する、との知らせも受けていた。ある意味では、ハインリヒは休暇をもらって、リタイアーすることと同じであつた。シーボルト兄弟は、彼らが一緒に協力して仕事のできる、千載一遇のチャンス、いなこれを逃したら二度とない最後のチャンスと見たのであろう。実際にハインリヒはベルツ医師の診断書をもらって、ハワイ、カナダ経由でロンドンに着いたのが八月のはじめ、すぐにヴェルツブルクで兄に合流している。

それに客観的な事実として、シーボルトの『日本』の初版は、一八三三年出版開始。そして終了が一八五一年である。この間継続して二〇分冊に分けて配布された。ということは、シーボルトが第一回目の日本滞在直後から約二〇年間、主としてオランダのライデンでの仕事の集成ということになる。シーボルトの妻・ヘレーネ・フォン・ガーゲルンが健康上の理由で、オランダからドイツのポツパルトに家族で移住した（二八四八年）後の数年間は別としても、ほとんどオランダでの、あるいはオランダとかかわつた作品であつた。しかしその後のシーボルトを見ると、ポツパルトからボンに引越したのも実のところ、日本研究をボンの地で、ボン大学を足場に深化させ、広くするものであつた。ドイツを拠点として、新たに日本研究の成果を世に出したのも少なくない。それに、シーボルトは、以前の日本の国外への追放の処分は解除されて、再度一八五九年に来日している。それから六二年の五月に日本を離れるまでほぼ三年日本に滞在している。長崎に二年、横浜と江戸に合わせて一年ばかり、要するに日本の幕末の時代にその時代の証人になっている。江戸では、かつての長崎の鳴滝塾のように、蕃書調所（後の洋学所）では洋学教授として、また赤羽根接遇所で外交顧問として大きな業績を残している。また以前と比べ、幕末の攘夷思想の激しさを増すなか、危険も少なくなかったが、比較的自由に研究調査を進めることができた。実は一八五二年以降のシーボルトは新しい環境、新しい時代、新しい日本を直接体験して、自らの研究にそれを生かしているのである。シーボルトが亡くなる

まで一五年ぐらい経過している。ところがかつての初版『日本』は、当然ながらこのような研究の成果を残念ながら踏まえていない。シーボルトの息子たちは身近に父の残した資料、作品と接している。『日本』の再版が刊行されるまで、優に四十五年近く経っている。シーボルトの息子たちがその『日本』再版の出版にこぎつけたのも、このような経緯があつたからである。もう少し具体的にみるとしよう。

『日本』再版の編纂者の意図

一八九七年に刊行された『日本』再版本の序文の中に、次のように書かれている。

『日本』の初版は、著者の自費出版で、分冊で世に出たが、周知のごとく未完成であつた。その再版本の編纂者の務めは、残された原稿をもとにこれらの穴を埋めること、それによつてこの作品をもとの構想によつて完成させること、これであつた（注6）。

実は、日本でも翻訳されて、世に出ている『日本』はシーボルトにとつて未完成であつた。これをシーボルト兄弟は知っていた。そこで、彼らは、発表されたものばかりか、未発表のもの、その後に書かれたものをすべて総点検して、再版に重要な、価値のあるものをまとめた。ただし、初版で発表されたものをすべて否定、削除してはいなかつた。むしろ今後も時を超えて価値のあるもの、評価の高いものは極力これを再版でも残し、生かそうとした。では編者たちは、新しい時代に立つて、新しい時代の基準に従つて、父親の遺稿を取捨選択したのか、というと必ずしもそうではない。むしろのちの時代を生きている編纂者の視点、尺度は極力排除されている。父シーボルトが生きて活動

したその時代をそのまま事実として踏まえてその作品を再現している。しかも編者はその時代考証を徹底化させている。再び序文を引用する。

この仕事は幸福な事情によつて容易になつた。すなわち遺稿集の中には欠落している部分がほぼ完全な完成状態で発見された。そのため編者らは単に最後の手を掛けさえすればよかつた。・・・

原則に忠実に、以前の作品の目的と一致させ、この初版は、その時代の日本の国民とその政治形態、歴史、宗教の本当の像が極めてオリジナル通りに再現されている。

第二版は、したがつて日本を今日のように、すなわちその制度、国民生活がますますと西洋の影響下に置かれ、変貌しているように、日本を描く、これをその目的としていない。むしろこの作品は、かつての日本がいかにしてこの一九世紀の半ばごろまで生き、努めてきたか、これを読者の眼前に描くこと、これによつてこれを日本の歴史の一里塚にすることが目的である（注7）。

そして父親はかつての江戸の動乱期に日本と深く係つた、幕末の歴史の証人であつた。息子らはその後の明治という時代の、疾風怒濤期を生きている、これまた時代の証人である。この再版本はかつての日本を映す貴重な資料として接すると、自ずと、現在と過去との比較から、大事な事実が浮かび上がってくる。

過去と現在との比較、われらの父親が体験し、記述した事柄と今日の日本との比較、これは、この国民がかくも短い間に、いかに遠い道を辿つてきているか、の証明になるであろう。

彼らが辿る道が狭くなり、険しくなればなるほど、祖国愛、忍耐そして犠牲的精神が目指した成果がますます大

きくなるのである（注8）。

このような編纂方針の下、再版の『日本』の編纂が着手された。しかしその際シーボルトの遺稿集がすべて採用されたわけではない。やはりその場合、編集者の意図というか、基本方針がうかがわれる。アレクサンダーがその再版の中の最初の前書きの中に、アレクサンダーは父親について興味深いことを書いている。編纂者、息子として父親をいかなる視点から取り上げるのか、がよく見て取れる。

アレクサンダーの父親の再評価

再版の『日本』には、編集者の前書きという形で、アレクサンダー自身による父親シーボルトのスケッチ風の伝記がある。シーボルトが亡くなって、三〇年後、アレクサンダーの五〇歳の時の作品である。シーボルト没後から三〇年の時を経てアレクサンダーが改めて父親の仕事を見直したものである。そこにはシーボルトの、後の時代から見た再評価が窺われる。実はこの編纂者の一人アレクサンダーはシーボルトの業績、仕事をいくつかの側面から強調している。一つには自然科学者としての側面。もう一つは、地理上の発見者としての側面。それにもう一つには、東アジアの歴史と文化の研究者としての側面。そして最後には、ヨーロッパと日本との文化交流の促進者及び仲介者・橋渡しとしての側面である。

最初の側面に関しては、日本は動植物、鉱物の宝庫としての認識の下、シーボルトは『日本』とは別に、『日本の植物』と『日本の動物』を完成させている。ただ日本の鉱物に関しては至らなかった。この自然科学者としてのシーボルトで無視してはならないことは、アレクサンダーは父親の医学者としての業績をも引き合いに出してい

る点である。それは、シーボルトが日本において最初に種痘を導入したことである。江戸参府の折、シーボルトが日本橋の、オランダ使節一行の定宿『長崎屋』で日本の医師、科学者たちの立会いの下、種痘を試みている。この点はアレクサンダーも歴史的な事実として将来のために記録したかったと見える。『伝記的なスケッチ』になかでこう書かれている。

追伸として、彼は控えめに書いている『私は種痘を日本に導入したのだ。この日本にとって計り知れない恵みは一八二八年の彼の江戸参府紀行にも証明されている。江戸で彼は様々な種痘を試み、將軍の侍医たちにこのような処方を知らしめた』(注9)。

当然この場面を含む『江戸参府紀行』は当時の日本の時代状況を直接知るものとして、この作品の価値は極めて高い、いな代表的な作品として位置付けられている。再版では巻頭の作品として取り上げられている。ただし初版では、実のところ、長崎から江戸往復の参府紀行にも関わらず、途中の播州室までの記述で終わっていた。日本で出版された『日本』の『江戸参府紀行』では初めから終わりまで、一部始終書かれているが、これはすべて再版本の『日本』から翻訳したものである。これはのちにまた取り上げるとする。アレクサンダーたちが未発表の原稿を見つけ、新たに加えたものである。

もう一つのシーボルトの地理学者、地理研究者としての側面については、もちろんシーボルトは大航海時代の発見者、航海者ではない。また長崎と江戸の間を往復してはいるが日本全国を旅行していない。しかし彼は日本で、伊能忠敬作成の貴重な日本及び周辺国の詳細な学術的な地図を手に入れた。この地図は江戸幕府の機密資料であって、これを国外に持ち出すことは厳しく禁止されていた。しかしシーボルトはこれをあえてしたのである。その結果、彼は

国外永久追放の処分を受けた。しかし同時に、知られざる土地であつた、東アジア、日本、蝦夷、樺太が地理学的に解明された。これがヨーロッパの地理学の発展には決定的な意味を持つた。まさにシーボルトの日本での研究によるものであつた。アレクサンダーもこれを父の業績の一つに挙げている。

それともう一つ、東アジアの歴史と文化の研究者としての側面は、『日本』のサブタイトルにあるように、父シーボルトの基本的な姿勢にかかわるものである。この点、アレクサンダーたちもしつかり踏まえ、継承、発展させた。『日本とその隣国、保護国——蝦夷・南千島列島・樺太・朝鮮・琉球諸島——の記録集。日本とヨーロッパの文書および自己観察による。』とある。最後の日本及び東アジアとヨーロッパの学術・文化交流に関しては自らもその渦中にある人物として、シーボルトはその歴史を研究した。しかし、シーボルト亡き後のことは、この再版『日本』にももちろん記述されなかつた。これらはむしろ後世の息子たちに課せられた仕事であつた。以上、編纂者の視点に立つて、シーボルトの業績を様々な側面から見て、まとめてみた。では具体的に『日本』の再版はどうなっていたのか。その初版本との比較において見ることにしよう。

II

一八九七年、編纂者アレクサンダーとハインリヒの連名で『日本』の再版が出版された。場所はヴュルツブルクとライプツィヒ。出版社は王立宮廷書店の出版部フォン・レオ・ヴェルル。二巻本である。第一巻は第一編と第二編、第二巻は第三編から第七編までである。以下、目次。

再版本『日本』第一巻、

第一編、地理研究と旅。

第一章、バタビアから日本への一八二一年の旅。

第二章、一八二六年の江戸参府紀行。

日本の地理とその発見史。

第三章、日本国の名称、位置、面積および区画。

第四章、ヨーロッパ人による日本発見と一九世紀初めまでのヨーロッパと日本の関係。

第五章、日本の発見史。フェルナン・メンデス・ピントの物語と日本人の報告による。

第六章、日本のオランダ人商館、平戸と出島の記述。

第七章、日本人の隣人、中国人、朝鮮人その他の国民との交流。

第八章、日本人の、自国およびその隣国と保護国についての地理的な研究の歴史的な概観。

第九章、日本地図についての注。

第二編、日本民族と国家。

第一章、日本人の起源について。

第二章、日本人といくつかの他の民族の人のつり目についての論議。

第三章、武器、武術および戦術について。

第四章、民族文化の発展と将軍家の創設の歴史。

第五章、日本の法律遵守の知識についての論評。

第二卷、

第三編、神話、歴史そして考古学。

天地開闢神話、日本古代史。

日本人の計時法について。

日本人の一日の区分について。

中国人と日本人の時計について。

曆について。

いわゆる盲曆について。

花曆について。

勾玉、日本の島に最も早く住んだ人々の宝物。

第四編。芸術と科学。

日本の度量衡と貨幣。

日本の鍼術知見補遺。

艾の効用について。

第五編。日本の宗教。

日本における神の神事（神道）、仏教（仏道）、孔子の教説（儒教）の歴史的概観。

日本列島の住民の古来の宗教である神の神事（神道）の概観。

偶像崇拜、日本における仏教の低俗な宗教的祭礼。

傳大士、解脱の偉大な教師。

釈迦の生涯の四つの時期。

第六編。農業、工芸、交易。

日本の茶の栽培と製法。

日本の交易。外国との交易の制限による国内の産業の発展。

一六〇九年から今日（一八四二年）までのオランダの交易史。

日本におけるオランダの航海と交易についての事実。

日本と中国人との交易。

日本とその保護国と隣国、朝鮮、琉球諸島、蝦夷、南千島列島そして樺太との交易。

国家の物質的補助資源。国民の生産的、工業的および商業的な階級。国内産業。

第七編。日本の隣国、保護国、蝦夷、南千島列島、樺太、朝鮮そして琉球諸島。

第一章、樺太と黒竜江地方についての情報。

第二章、蝦夷および樺太のアイヌ種族。

第三章、アイヌの言語。

第四章、蝦夷・樺太および日本領千島の天産物。

第五章、琉球諸島とその住民の、日本側の資料による記述。

第六章、沖縄本島植物目録。

第七章、日本の海岸に漂着した朝鮮人より得た朝鮮事情。

第八章、語彙。

第九章、朝鮮人、対馬の日本の武士および役人、釜山における日本商館などから得た種々の情報。

第一〇章、韃靼海岸に漂着し、北京へ送られ、そこから朝鮮を経て故郷へ返された日本人漁民の

朝鮮見聞記。

第十一章、朝鮮国の制度、官吏及び延臣。

ところが四十五年前に刊行された『日本』初版本は、このような適格な、理になつて整理された分類に基づいていなかった。発送した分冊に従つて、分類され、編纂されていた。各章にまでは立ち入らないが、編だけでもここに紹介しておこう。

『日本』初版。

第一卷、第一編、日本の地理とその発見史。

第二編、日本への旅。

第二卷、第三編、日本民族と国家、民族文化の発展および現国家形態の生成と確立の歴史。

第四編、一八二六年の江戸参府紀行（一）

第三卷、第四編、一八二六年の江戸参府紀行（二）

第五編、日本の神話と歴史―天地開闢神話、日本古代史

第四卷、第六編、勾玉、原題考古学―古代日本島住民の宝物である勾玉。

第七編、日本の度量衡と貨幣。日本国の尺度・面積・柵目・目方・貨幣本位について。

第八編、日本の宗教。

第九編、茶の栽培と製法。

第一〇編、日本の貿易と経済。

第五卷、第一編、朝鮮。

第六卷、第二編、蝦夷、千島、樺太および黒竜江地方

第三編、琉球諸島。

付録一、日本人の起源について。

図録

第一卷、日本の地理とその発見史。

平戸と出島。

日本民族と国家。

第二卷、民族と国家―武器、武術および戦術について。

日本の神話と歴史

神話と歴史の図版解説。

中国人と日本人の時刻について。

暦について。

いわゆる盲暦について。

勾玉。

第三卷、日本の宗教。

茶の栽培と製法。

朝鮮。

蝦夷・千島・樺太および黒龍江地方。

この初版の第六卷までの翻訳本『シーボルト「日本」』と図録三卷までが日本に紹介され、普及している。

アレクサンダーとハインリヒ編纂の一八九七年の再版『日本』はその全体で日本に紹介されることはなかった。この初版本の分類は一見して、少し雑な、一定の方針に従っていないように見える。しかし内容的にはすべてシーボルトの手になるもので、それはそれとして、その意義と価値については、変わりはない。ところが、両方の版を仔細に比較観察してみると、重要な、無視できない事実に出会う。例えば、初版の第六卷の付録の一から五まではすべて後の再版に分野別に適切に採用されたものである。初版本の翻訳が日本でなされた昭和五〇年代に訳者たちによって、それらの真価が認められ、初版本の中にも取り入れられたものである。が、よく見ると、これに限らず、再版本の方が全体の構成というか、分類、章立てという、編集者の基本的な姿勢・方針が際立っている、と言わざるをえない。それぞれの版を比較しながら、見ていくとしよう。

まず再版本『日本』の第一編では、旅行と地理をセットにして、まずはシーボルト自らの旅行、オランダ、バタヴィアから日本までと長崎から江戸までの往復旅行を踏まえる。その後、時系列に日本とヨーロッパとの交易のプロセスを辿る。ところが本来の初版本の方では、ヨーロッパから日本までのシーボルトの旅と彼の江戸参府紀行をそれぞれ分離させ、独立させて、発表している。つながりが切れている。しかし再版の方では、それぞれ時間的にも空間的に関連して、時系列で見ることでもでき、また地理的にも空間的にも比較的に自然に移動できる。こういう配慮も編者にはあった、といえよう。

もう一つ大事な点は、実は、シーボルトの江戸参府紀行は、初版においては、長崎から江戸までの前半の往路のみ、正確に言うと、長崎から播州室までの紀行文で終わっていたのである。それをアレクサンダーらが父の遺稿集から探

して、これを再版で発表したものである。もちろん日本人訳者たちも初版のその不備に気が付いていた。再版の『江戸参府紀行』を底本として、訳出したのである。

再版の第二編、日本民族と国家も初版本とはかなり内容が異なる。初版本の第三編では日本民族文化の発展および現国家形態の生成と歴史のみが扱われている。そもそも民族学や人種学及び日本固有の諸制度を対象とした分野であった。そこを編者は改めた。もちろん民族文化の発展の歴史と将軍家創設の歴史とタイトルを改めたが、内容は、若干、アレクサンダーが加筆しているものの、ほぼ以前と変わらない。しかし編者はこのほかに、日本人の起源について、日本人と他の民族のつり目について、武器、武術および戦術について、さらに日本の法律についての諸論文をこの第二編に組み入れた。ちなみに日本人の起源論と日本の法律遵守の知識についての論評は、初版の翻訳の中には、最後の付録として収録されている。

再版の第三編、神話、歴史そして考古学は初版の第五編、日本の神話と歴史に対応している。しかしその内容からしてまるで異なっている。確かに、日本の神話は天地開闢神話として扱われていて、実際の日本の古代史とは分けて捉えられている。その点は、初版と再版では同じである。しかし初版のこの第五編では、和年契をもとにした、日本の歴史年表がそのまま掲載されていた。これは再版ではほとんど削除された。その代り、日本人の計時法、日本人の一日の区分、暦、いわゆる盲暦、花暦、そして勾玉についての論文がこの第三編に掲載されている。ただ中国人と日本人の時計については、初版の図録の第二巻の中に論文と共に収録されている。ちなみにこの勾玉論は、初版では、考古学に分類されずに、独立して扱われていた。それがこの考古学編に組み入れられた。それに初版では、日本の神話と歴史とあるだけで、日本の計時法、日本人の一日の区分、それに花暦はその編の付録としてすでにあった。しかし中国人と日本人の時計、暦および盲暦についての論文は、再版本に初めて採用された。きっとシーボルトの息子たちが、父親の遺稿集の中から探しあてたものであろう。

再版の第四編のタイトルは、芸術と科学とある。かつて初版本では、第七編に独立して、日本の度量衡と貨幣とあったものが、再版では、この分類の下に採用された。さらに再版では日本の医学及び東洋の医学として、日本の鍼術知見補遺および艾の効用についてという論文が初版の付録として採用されている。

再版の第五編、宗教は、ほとんど初版のそのと同じである。ただし『傳大士、解脱の偉大な教師』と『釈迦牟尼、釈迦の生涯の四つの時期』は再版初出である。

再版の第六編、農業、工芸、貿易は、初版の第九編、茶の栽培と製法と第一〇編、日本の貿易と経済のそれぞれ別個の独立していたものを合わせたものである。

再版の最後の第七編は、日本とその隣国、保護国―蝦夷・南千島列島・樺太・朝鮮・琉球諸島―の記録集。タイトル通りに、樺太、アムール地方、蝦夷とその住民アイヌ人、さらに南千島から琉球に研究・調査対象が移る。それから朝鮮とその様々な情報を報告することと終わる。ところが初版では第十一編が朝鮮というタイトルのみである。しかしそこには朝鮮のみならず、中国も含まれている。第五章の朝鮮国の制度、官吏及び廷臣の後、第六章、中国の語彙「類合」―朝鮮語訳および中国語の朝鮮読み併記、J・ Hoffman 校訂訳、第七章、日本の文献による日朝・日中関係、J・ Hoffman 著。第一節、朝鮮半島史総説、第二節、日本側の資料より見た日本と朝鮮および中国の関係。付、西暦二〇〇年における日本の新羅遠征伝説。第八章、千字文。これらは初版には掲載され、日本にも翻訳されている。しかしアレクサンダーらの編纂の『日本』再版には、載っていない。これらの論文は直接、朝鮮のみを扱ったものではないと見たか、それとも父シーボルトの筆になるものではないと、見たか。これは定かでないが、第六章から第八章まで削除されている。

シーボルト息子たちの編纂の『日本』には、初版のように、別冊の『図録』三巻はない。絵図は必要最小限にとどめて、二巻本の中に収められている。以上、ごく大まかに初版本と再版本を比較・考察した。最後にまとめとしてこ

れらを踏まえて、シーボルト兄弟の父親観、父親の評価・再評価がいかなるものであったか、まとめてみたい。

まとめ

前に、シーボルトの『日本』を再版するにあたって、編者が少し論文に手を加えた、と書いたが、一応念のためにそこを指摘しておく。翻訳本の初版第二巻の第三編『民族文化の発展および現国家形態の生成と確立の歴史』の中の織田信長が天下統一する時期のことである。

「信長自身と二人の息子すなわち長男の信忠と次男の信雄とは、直轄領に隣接する越前、美濃、尾張、近江、伊勢をも領有することになった。かれのきわめて勇敢な武将である秀吉はすでに一五七五年から筑前の地を封土として所有していた。」^(注10)で始まり、「また信長は子孫代々絶対独裁制を布こうとしており」^(注11)まで加筆されている。こ

れはほんの一部かもしれないが、ほかにも読み比べると、いろいろな事例があるかもしれない。ちなみに、この第三編の論文は、初版では織田信長あたりから始まる後半は未発表であった。それを日本の訳者たちは、一八三六年に『日本』の初版を復刻し刊行したトラウツ版の後半を日本語に翻訳して、初版本に載せた。その後半の部分のみ草稿として番号が三十六まで打つてある。もちろん再版にはこれは取り除いてある。しかしそれはともかくとして、ほとんどシーボルトの発表した、あるいは未発表の論文であることには違いない。これはシーボルトの息子たちの基本的な編集方針であった。同じ日本学の後継者ホフマンとはいえ、彼の手になるものは、再版からは削除された。ともう一つ、初版では、別冊という形で、図版が三巻で別個に出版されていた。しかし再版では図版は必要最小限に各論文の中に挿入されている。編者はよく整理された分類に従って、可能な限りシンプルで分かりやすい編纂を心掛けている。さてそれでは、この第二版の編纂を通じてシーボルトの息子たちは、父親の、研究者としてあるいは日本および東洋と

西洋との学術文化の交流者としての側面をどう見ていたのか。その点を最後にまとめてみたい。三点ある。

第一点。

1. 西洋医学の伝達者と東洋医学の理解者にして紹介者としてのシーボルト

初版の『江戸参府紀行』には、江戸へ行く途中の播州室あたりで紀行文が終わっていた。しかし重要なことは、そののちの特に江戸でのシーボルトの行動である。医学史的に見て、シーボルトが一八二六年の時点で、日本で種痘を試みたという事実は大変重要な、画期的なことであつた。日本ではオランダの医師・オットー・モーニケが一八四八年に日本で初めて種痘を試みたということが定説になつている。しかしそれよりも二〇年ほど前に、シーボルトが日本人の医者たちを前にしてこれを試みている。これが『江戸参府紀行』の中にも記されている。ただしこの場面が再版の『日本』を通じて世に知られたのは、一九世紀も末のことで、遅きに帰したかもしれない。それと再版では『芸術と科学』という編を設けて、東洋および日本の固有の医術として、鍼と灸について論じている。しかもシーボルトはこれを非科学的とか、医学的ではない、と退けていない。むしろこれらに深い理解を示している。むしろこれらから積極的に学ぼうとしている。医学論文、『日本の鍼術知見補遺』と『艾の効用について』は再版で初めて紹介され、発表されたものである。それが日本の翻訳者たちの目に留まつて、初版の中の付録として最後に掲載されたものである。

第二点。

2. シーボルトの複眼的な比較考察者としての基本姿勢

そもそもシーボルトは学術研究の基本姿勢として日本と西洋、あるいは日本と隣国のそれぞれの立場に立つて、物事の比較を貫いている。いわば近代的な比較研究の走り、先駆けとみてよい。同じ日本論であつても、日本のみを絶対的に追及するのではなく、日本を隣国あるいはヨーロッパとの比較において相対的に論じている。それゆえにシー

ボルトの日本論はユニークであり、独創的である。しかもシーボルトは伝統的なヨーロッパの教養をもって日本研究に意欲的に携わってきた。そしてそれが様々な分野で結実している。前に指摘した医学論文と並んで、もう一つ、『日本人の起源について』という論文にもまさにその成果が実を結んでいる。

日本の考古学や日本人の起源に関しては、まさに、次男ハインリヒの得意とする分野である。かつて二〇一一年に筆者は、日本の考古研究者としてのハインリヒ・フォン・シーボルトを取り上げた^(注13)。そのハインリヒが再版のもう一人の編者になっている。そしてこの論文がその刊行年の一八九七年に初めて世に出た。その意味でハインリヒがかなり父親の未発表の原稿に手を加えたであろうことが推測される。たとえば日本人は混成民族、つまり雑種であるとか、崇仁天皇の在位の時に殉死が廃止され、それに代わって、土人形・埴輪が作られた、との事実が引用されている。ハインリヒの作かと思わせる節が多々ある。しかしそれを凌駕するような、新しい事実も明らかにされている。たとえば人類学や解剖学の見地から、日本人の目の一重瞼、つまりつり目を日本人固有のものとし、日本人と蒙古人との近親性を指摘している。さらに東アジア人の諸言語にシーボルトは注目している。

私は日本人の物理的な特性のうちすでに、特にこれらに特徴として表れていて、アジアであれ、新大陸であれ別の国民と何か近親性を示しているものを考察した。――私は再び言語に向かう。私は何度も移動して強力な征服者として表れたあのアジアの民族の多音節の語彙に、日本語の語彙との際立った類似性を認めることができる、^(注14)と思っている。ゆえに、私がこの二つの言語を比較すれば、民族学に重要な貢献ができると思う。

こうしてほかに東アジアの諸言語と日本語を比較考察し、さらに宗教、風俗、習慣、文化も相互に比較して、共通なものとは異なるものを確認する。こういう近代的な比較方法に則って、シーボルトは論を進める。こういう方法は残

念ながらハインリヒはまだ身に着けていなかった。父シーボルトだからこれが可能であつた。こういう点でも父親シーボルトの日本研究は画期的であつたし、また時代をリードしていた。この点を息子たちも、後世の人に伝えたかつたのであろう。この論文にもあるようにシーボルト自身、このようなスケールの大きな比較研究をつづけたのも、一つにはアレクサンダー・フンボルトの存在を意識してのことであつた。

第三点。

3. 地理・地誌の研究者にして旅行家としてのシーボルト

アレクサンダー・フンボルトは探検家として世界各国を旅行して、各地の動・植物相、鉱物、さらには人文地理を調査研究した。世界を一周し、鎖国の日本の近郊、樺太まで来ている。彼はシーボルトに、未知のヴェールに包まれている日本の地理研究、さらには日本の植物相、動物相、地質を含めた自然研究を期待したのである。シーボルトもフンボルトの激励を受けて、再度一八五九年に日本へ旅立つた。このいきさつは、長男のアレクサンダーはよく知っていた。作品『日本』には日本の植物相、動物相、地質についての詳しい論文は収録されていない。しかしこの『日本』と同時にシーボルトはドイツ人の学者と共に自然科学研究を推し進めていた。植物学者のJ・G・ツツカリーニとN・V・エーゼンベックらはかれの仕事仲間、協力者であつた。自然科学ばかりでなく、人文地理学、地域の産業、商業、生活、宗教、文化、科学、風俗、習慣、芸術等も当然シーボルトの研究対象に含まれている。しかも当時の日本は鎖国状態で、中に入って仕事のできる外国人研究者はごく限られていた。シーボルトはその唯一例外的な研究者であつた。シーボルトも力の限りを出して、日本を自然科学、社会科学、人文科学を総動員して、総合的に研究したのである。そうしてできたのがこの『日本』であつた。『日本』には、日本各地の総合的な研究があるとみてよいであらう。代表作『江戸参府紀行』もある意味では紀行・旅日記という性格を超えて、地域の地誌・文化の総合的な研究成果と見て取れなくもない。シーボルトの息子たちも『日本』の再版を出版するにあたって、父のこのような日本

の総合的な学術研究者としての役割をしつかり確認し、評価して、後世にそれを伝えた、といえよう。

以上、シーボルトの息子たちは、ドイツ語圏の、ドイツ語の分かる読者を想定して、この作品の再版に踏み切ったのは言うまでもない。その場合、なるべく複雑な日本をわかりやすく、よく理解できるように、新たな分類の下で、諸論文を整理し配列した。これによつて、シーボルトが見直され、再評価されたともいえよう。これこそ息子たちが父親の遺志を継承した記念的な事業といえるのではないか。

最後にドイツ人の中に、シーボルト兄弟及び彼らの再版の『日本』を高く評価する人がいた。その人の名は、オットマール・フォン・モール。明治の一時期、宮内省の侍従武官を務めたドイツ人である。シーボルト兄弟とは交流が深い。最後の結びとして彼の文章を引用することで、この論を終えたい。

この時代（鎖国時代）についてはアレクサンダー・シーボルト、およびヘンリー・シーボルトの両男爵が一八九七年、二人の父君にあたる、かの有名な自然科学者で医師のフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの著作を編纂した書物の中に、もつともすぐれた情報が記されている。この興味深く価値のある書物を、わたしはこの機会に広く推薦したいとおもう（注1）。

注と文献

（1）ヨーロッパ各国での条約改正交渉は、早稲田大学高等学院研究年誌第五七号『日欧文化交流史のなかのシーボルトの息子たちⅢ―日・独条約改正交渉（一八八八―一八八九）におけるアレクサンダー・フォン・シーボルト』（二〇一三年三月発行）と同じ研究年誌第五八号の『日欧文化交流史の中のシーボルトの息子たちⅣ―一八九〇年代前半のヨーロッパでの条約改正交渉におけるアレクサンダー・フォン・シーボルト』（二〇一四年三月発行）に詳しい。

- アレクサンダーと伊藤博文との協力関係については同じ研究年誌第五六号『日欧文化交流史の中のシーボルトの息子たちII—伊藤博文の助言者にして協力者アレクサンダー・フォン・シーボルト—』(二〇一一年三月発行)に詳しい。
- アレクサンダーと日本赤十字社とのかかわりについては同じ研究年誌第六〇号『日欧文化交流史の中のシーボルトの息子たちVI—シーボルト兄弟の日本赤十字社創立への貢献—』(二〇一六年三月発行)に詳しい。
- (2) 同じ研究年誌五九号『日欧文化交流史の中のシーボルトの息子たちV—日清・日露戦争期(一八九四—一九〇四)のアレクサンダー・フォン・シーボルト—』(二〇一五年三月発行)に詳しい。
- (3) アレクサンダーの一九〇八年八月十五日の日記に細川はなの名が出てくる。細川はなを「日本の家政婦」と記している。Acta Sieboldiana VII, Alexander von Siebold, Die Tagebücher, B 1893-1911, S. 1342.
- (4) 一八九六年五月一七日付の佐野常民からアレクサンダーあての手紙から引用。Acta Sieboldiana IV, Briefe aus dem Familienarchiv von Brandenstein Der Kreis um Alexander und Heinrich von Siebold, Otto Harrassowitz Wiesbaden 1991, S. 92.
- (5) Acta Sieboldiana VII, Alexander von Siebold, Die Tagebücher, B 1893-1911, Harrassowitz Verlag, Wiesbaden, 1991. S. 813. 引用。
- (6) 『Nippon』 Archiv zur Beschreibung von Japan und dessen Neben- und Schutzländern Jesso mit den südlichen Kurien, Sachalin, Korea und den Lukiū-Inseln von Ph. Fr. von Siebold, Zweite Auflage, herausgegeben von Seinen Söhnen, Würzburg und Leipzig, Verlag der k. u. k. Hofbuchhandlung von Leo Woerl. 1897, Vorwort zur zweiten Auflage X から引用。(早稲田大学中央図書館花房文庫所蔵)
- (7) 『Nippon』 Zweite Auflage. Vorwort zur zweiten Auflage X から引用。
- (8) 『Nippon』 Zweite Auflage. Vorwort zur zweiten Auflage X から引用。
- (9) 『Nippon』 Zweite Auflage. Philipp Franz von Siebold. Eine biographische Skizze. S. XVI. 引用。
- (10) フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト著『日本—日本とその隣国、保護国—蝦夷南千島列島・樺太・朝鮮・琉球諸島—の記録集。日本とヨーロッパの文書および自己の観察による。』第一巻から第六巻、図録第一巻から第3巻、監修岩生成二、図録監修斎藤 信、昭和五二年二月二二日、発行所雄松堂。後『シーボルト「日本」』と称する。
- (11) 『シーボルト「日本」』第二巻、四〇ページ引用。

- (12) 『シーボルト「日本」』第二卷、四一ページ引用。
- (13) 早稲田大学高等学院研究年誌第五五号『日欧文化交流史の中のシーボルトの息子たち I ―日本の考古研究者ハインリヒ・フォン・シーボルト―』二〇一二年三月発行を参照。
- (14) 『Nippon』Erster Band, Abteilung II Volk und Staat, Über die Abstammung der Japaner, S. 288 引用。
- (15) オットマール・フォン・モール著、金森誠也訳『ドイツ貴族の明治宮廷記』二九一ページ引用、二〇一一年一二月二二日刊行、講談社。

二〇一六年一〇月末日記す。

